

珠光一紙目録一

この一卷は、珠光が目利き稽古の道を、能阿弥に問い究め、その内容を日記としてつづったものである。後継者、宗珠へ相伝した。(ある本によれば、末子に相伝したとある)引拙の時代までは、珠光の風である。その後、紹鷗がことごとく改め、加筆を終えた。紹鷗は当時の偉人であり、先達、中興である。追加の一卷は辻玄哉つじげんやまで相伝された。茶の湯の道具と秘伝が追々記されている。さて、この内茶の湯の行き方はすべて禅からきたものである。口伝・秘伝は口頭にて伝えたい。書いたものはない。奥書に載せたものだけである。

紹鷗が逝去して三十余年、今、茶の湯の先導者は宗易そうえきである。すなわち宗易尊師に二十余年の間、聞き置いた秘伝の数々をこれへ書き改め、勘考しているところ。名物一種一種についての目利きの習い、奥儀おうぎがここにある。とどまるところ、数寄者の覚悟とは、禅の心をもつてなすべきである。

紹鷗末期の言。

料知す。茶味と禅味同じなること

松風を吸い尽くして、こころいまだ汚れず三

唐物は代価の高下こうげによらず、床に飾る道具をもつて名物とよんだ。大壺と三つ石は、昔より床に飾つてきた。その他、当代千万の道具はみな紹鷗の目利きによって選り出されたものである。

大壺の次第

私見。本編は珠光目録の写しに紹鷗加筆を元として、さらに宗二が自説を書き加えたものと思える。

一 三日月

このお壺、茶が七斤ななきん入る。天下無双の名物なり。大きな瘤こぶが七つ。前に腰袋を付けたような格好で、横長の瘤がある。その様が前へ少し傾いたように見え、面白い。それで三日月と名付けたということだ。下膨しもぶくれの様も珍しい壺である。これは、その昔、奈良興福寺の内、西福寺にあったものだ。後に日向屋道德の所持となる。次に、下京の袋屋。さらに三好実休みよしじつきゆう四へと渡る。戦乱に遭い、河内国高屋

城にて六つに割れる。これを堺の宗易が継ぎ直し、太子屋の手で信長公へと奉ることとなった。(三好の老衆が三千貫にて太子屋へ質入れしていたものだが、太子屋がこれを信長公に捧げたのである) 割れてなお、その値は上がり続け五千貫、一万貫と果てもない。お壺の様子は口伝する。しかし、総見院殿の本能寺の変にて焼失五してしまった。

一 松島

このお壺、茶七斤と少し入る。紫の土、釉の様は、真壺まつぼの手本である。三日月が無双の壺といえども、松島には劣る。二つを比べ、松島がよい、と古人も言い伝えるのだ。形はなるほど、三日月が面白い。しかし、この壺を松島と名付けるそもその理由。奥州松島は小島が多く、面白い名所である。この壺に島の如く、瘤が多いゆえ、これを松島と名付けたのである。

これら二つともに東山御物なり。その後、御物は方々に散失。松島は、桃山中期、三好宗三さんごうむねみつの所持となる。後に宗三の子、右衛門太夫みぎのゑもんたふ三好政勝が、紹鷗に売った。次の所有者、今井宗久いまいそうきゆう八が信長公に奉ったのである。これも、総見院殿、本能寺の変にて焼け失せた。

一 四十石のお壺

このお壺、茶七斤半入る。関白様(豊臣秀吉)のものである。昔、真壺の値が百疋、二百疋かといわれていた時、千本の関本道拙が、米四十石の田地で求めたゆえ、四十石といった。ただし、四十石と

いう名は、東山殿御物となつてより付けられたものである。御物散在後、南都の蜂屋紹佐じょうすけ九が所持。その次、堺の宗訥そうとつ一〇。後に関白殿へ上る。松島・三日月滅して後、天下一の壺であろう。その壺味は、三日月と同じ。さらに口伝がある。

一 松花しょうが

このお壺、茶が七斤入る。黄清香きせいこう二の壺である。土は黒色。瘤が二つあり。下釉は白っぽい赤。この清香の壺、松島・三日月・松花と三名物に数えられること誉れほまである。壺のお茶閑味ちやかんみは、名人衆も驚くほどという。古い言い伝えである。さらに口伝あり。松花、元は珠光所持。次に、誉田屋宗宅。その次、道陳どうちん三。そして、信長公へ奉つた。本能寺の変に、堀秀政が救い出し、関白様へと献上したのだ。

一 捨子すてこ

関白様所持。この壺には茶が七斤と袋七つ、八つほど入る。お茶味のことはいうに及ばず、土もよく、釉かじかみ、上部に霜が降つたような面白いあんばいである。ある時、心敬しんけい二三が伺候しこうすると、

「この壺ほくくに発句ほくくせよ」

との上意である。頃も口切くちぎり二四の折りであれば、

ささかじけ 橋に霜おくあしたかな

と詠んだ。

この壺には「乳」がないので、捨子と名付けられたという旧説がある。が、これは誤り。乳は四つ、いかにも見事にある。東山殿が初めてご覧になって、御物とされた時、能阿弥を召し、

「これほど見事な壺に名がないとは。さては捨子か」

と仰ったという。そのお言葉により、すなわち捨子となった。

一 撫子なでしこ

このお壺、茶が六斤と袋七つ入る。瘤は大小あわせて十ばかり。撫子と呼ぶいわれ、草花の名によるものではない。篠殿秘蔵し、つねに子の如く、さすり愛でたゆえ、撫子というのだ。口伝あり。この壺は関白様所持。

一 沢姫二五

この壺、七斤半入る。なり、胴のはり、ひときわ珍しく、口にえくぼがある。土釉、お茶閑味、いうにいわれずよい。関白様へ、森武蔵守二六より進上されたもの。

一 象潟きさかた一七

この壺には、瘤が大小十四、五ある。「きさかた」と名付ける所以ゆえんは、松島より勝るといふところである。歌に詠む。

松島や おしまの海士あまの浦よりも

なおまさり行くきさかたの月

一 時香ときのか

この壺には、瘤が大小二十ばかりある。お茶、五斤入る。さらに口伝あり。この壺を時香と呼ぶのは、新茶を入れた場合、その時の香を後までよく保つゆえである。一説に、その名をしか(志賀)とも書く。この壺は、珠光の弟子、宗珠が持ち随一の楽しみとしていたのだ。後には、豊後の太守に渡り、彼より関白様へ献上された。

一 兵庫壺

このお壺、七斤入る。ご本所様所持。もとは荒木摂津守二八、掘り出し物の壺である。土釉、見事。瘤が二十ばかりある。お茶閑味、四十石と同じ。

一 弥帆壺やほ

この壺、もとは三好山城守二九が所持していた。後に大納言秀長公三〇へ。お壺よし、と茶の名人衆が賛美した壺である。

一 橋立

この壺、七斤入る。土釉、なりともに言語を絶するできばえである。宗易所持。名人の宗易が所持するほどのもの、お茶閑味はいうに及ばず。さらに、いくつも口伝がある。

この壺は、丹後の国より出でるが、丹後の国にも過ぎた名物ゆえ、橋立と名付けられた、と旧説にいう。また一説では、東山殿、この壺を召し上げられた時、添え文も見ずに、まず壺をご覧になった。それゆえ、

まだ文もみず あまの橋立て

という古歌三にちなんで、壺の名を橋立とつけた、ともいう。

一 九重ここのえ

この壺、七斤以上入る。匂い深い壺ゆえ、

今日九重に匂ひぬるかな

の古歌三にちなみ、九重と名付けられたとある。口伝あり。堺、もずやせうあん万代屋宗安三所持。

一 八重桜

この壺、七斤入る。明智日向守が所持する。この壺も九重に等しい壺ゆえ、

いにしえの ならの都の八重桜

という古歌をもつて名付けられたという。日向守死去の時、坂本城にて火に入り、滅する。口伝あり。

一 寅申ひんしん

この壺、六斤と袋茶八つ入る。元は、天王寺の市にて買い求められたものである。天王寺の市が立つ日は、寅と申。ゆえに、かように寅と名付けられたのだ。堺、祐長宗珍所持。

一 白雲

この壺、七斤入る。土釉よく、お茶閑味にいたるまで、余すところのない名品である。古人も賛美した。口伝あり。家康公の御物。

一 裾野

この壺を珠光が見て、遠山えんざんが下方へ広がったおもむきのようなのである、として裾野と名付けた。お茶味、天下無双。さらに口伝がある。前田殿所持。

一 雙月そうげつ

この壺、六斤と袋七つ入る。瘤、五つ六つあり。三日月の壺に「雙なふ」というところで、雙月と名付けられた。蒲生飛騨殿二四所持。

一 時雨しぐれ

この壺、六斤と七つ。釉に時雨の降る風情あり。十月頃に口を切れば、別して面白いと、この名がつけられた。紹鷗が褒美した壺である。長岡越中守二五殿の所持。

一 浄林の壺

この壺、六斤七つ入る。釉のさま、見事。値、金五十枚にて、関白様より拝領したものである。堺、天王寺屋宗及てんのうじやそうぎゆう二六所持。

一 千種ちんしゆ

この壺、元は引拙ひんせ所持。堺誉田屋徳林にあり。

一 深山

この壺には、遠山えんざん二八が二つあり、古人が名を遠山とつけた。京の立売町で見出されたもの。これらの壺は、拙子が四十三歳の内にことごとく見たものである。

このほかに、多少名物にまさるほどの壺が方々にある。真壺はその数、知れぬほど。さらに口伝がある。大壺は、口に轆轤ろくろが三筋ある。腰には遠山が。これを真壺という。ただし、三日月、松島には遠山がない。そのような壺もまた多いものである。

一 石いし二九

盆石ぼんせき、昔は多くあった。高麗鉢、または塗り鉢に立てたものである。今は全くすたれてしまった。

ただし、末の松山と残雪は名石ゆえ、今に至るも賞玩しょうがんする。当時、値三千貫であった。口伝あり。

一 残雪

この石、長さ五寸、幅二寸八分、高さ一寸九分。色は黒い。石に、高所と卑ひくいところ三〇がある。拝見していないゆえ、旧説によった。

一 末の松山

この石もおおかた似た風情である。上下一寸八分、横五寸三分、前後一寸九分ばかり。高い山があり、黒が、白い地の上に交わっている。

末の松山浪こさじ

の歌三のころである。残雪・末の松山ともに、なりは不定である。鉢に立てるには、備後砂という、米粒ほどの白砂を敷く。名人上手ほど、なりが違って見えるように立てうるものである。ただし、当世はいかが。この石、拙子拝見している。さらには口伝する。

一 よい花瓶には、よろずの草花を入れるべし。花の上手にあつては、いずれの花であろうと心次第のもの。花に決まりをいうのは、初心者のためである。口伝する。

一 珠光一紙目録 一枚の小紙に書いた珠光の秘事口伝の目録。本著のどの章までが元の「珠光一紙目録」なのか不明であるが、諸本おおよそは「茶の湯者の伝」までとしている。ただし、元の一紙目録に、紹鷗・宗易が加筆修正し、宗二自身も「書き加えた」とあり、どの章、どの部分が、誰の加筆なのかはいまのところ不明。よつて本著では、記載内容より推し量り、名物目利きの「侘花入、花の事」までを一紙目録と仮にとらえ、「茶の湯者覚悟十体」以降を別の章立てとし読書の便をはかった。

二 辻玄哉 室町末期の茶人。京の呉服商墨屋を営む、または堺在住ともいわれる。武野紹鷗の一の弟子。連歌でも師事していた。

三 料知す。茶味と禅味： 原文は「料知茶味同禅味 汲尺松風意未塵」。紹鷗が、南宗寺 大林和尚から居士号を授かったおりに与えられた偈頌(徳をたたえる詩)の後半部。「茶禅一味」思想の源流といわれる。

四 三好実休 三好之康(一五二八―一六二〇)。室町末期、阿波の武将。三好長慶の弟。紹鷗に師事。物外軒と号す。

五 本能寺の変にて焼失 信長祐筆の「御茶湯道具目録」では、松島、万里江山図・虚堂墨跡などと同様、この三日月も安土城より本能寺には搬入されていなかった、と見られる。

六 真壺 呂宋壺と呼ばれる葉茶壺の一種。文字・紋様の刻のないもの。

七 三好宗三 三好政長(一五〇七-四九)。室町末期阿波の武将。通称神五郎。紹鷗に師事。

八 今井宗久 一五二〇-九三。和泉堺の豪商で茶人。紹鷗門下。信長、秀吉の茶頭をつとめる。

九 蜂屋紹佐 室町末、安土時代の奈良の富商・茶人。

一〇 堺の宗訥 錢屋宗訥(一五九〇)。姓は松江、錢屋は屋号。安土桃山時代の堺の商人・茶人。利休門下。

一一 黄清香 清香。呂宋壺と呼ばれる葉茶壺(大壺)の一種。肩に「清香」の文字が刻印されている。形は、口に特色があり「清香口」といわれる。

一二 道陳 北向道陳(一五〇四-六二)。本姓、荒木。室町末期、堺の茶人。武野紹鷗と親交。利休を紹鷗に推挙した。住居が北方に面していたので、北向を姓としたという。

一三 心敬 室町期の連歌師(一四〇六-七五)。和歌・連歌を清嚴正徹に学ぶ。『ささめごと』『心敬紀行』作者。

一四 口切 茶事の一。初冬、茶壺の封を切り新茶を挽いてふるまう。口切の茶事、口切の茶会などという。

一五 沢姫 東山御物であった時の名称。「さは姫」「さはひめ」などと書く。のち津田宗及が「佐保姫さほひめ」と改めた。

一六 森武蔵守 森長可(一五五八-八四)。信長、秀吉幕下の猛将。長久手の合戦にて没。遺書により沢姫茶壺を秀吉に贈った。

一七 象潟 かつて出羽の名勝地。文化元年(一八〇四)六月、地震で地形が隆起するまでは、入江をとともなうみごとな景勝で知られ、松島とならび称された。

一八 荒木撰津守 荒木村重(一五八六)。撰津伊丹城城主。信長に背き、毛利氏をたよる。後剃髪して茶に親しむ。利休七哲の一。号は筆庵道薫。

一九 三好山城守 三好康長。号は笑岩(一五二四-八一)。室町末期、阿波三好一族。武野紹鷗門下の茶人。三好長慶・

実休の叔父。

二〇 大納言秀長公 羽柴秀長(一五四〇―一九一)。秀吉の異父弟。大和郡山城主。

二一 古歌 「大江山 いくの道のとほければ まだふみもみず天のはしだて」小式部内侍『金葉集』雑上。

二二 古歌 「いにしへの ならの都の八重桜 けふ九重にほひぬるかな」伊勢大輔『詞花集』春。

二三 万代屋宗安 安土桃山時代の堺の商人・茶人。渡辺新太郎。号は竹溪。利休の弟子で女婿。秀吉の御伽衆。

二四 蒲生飛驒殿 蒲生氏郷。近江日野城城主。キリシタン大名。利休七哲の一。利休切腹後、次男少庵を援ける。

二五 長岡越中守 細川忠興(一五六三―一六四五)。号は三斎。利休七哲の一。

二六 天王寺屋宗及 津田宗及(一五一九―)。安土桃山時代の堺の豪商・茶人。会合衆のひとり。宗達の長男、宗凡の

父。通称助五郎。南宗寺大林宗套に参禅。今井宗久・千利休とともに信長茶頭をつとめる。信長没後は秀吉茶頭。『津

田宗及茶湯日記』がある。

二七 引拙 鳥井引拙。

二八 遠山 壺の乳のこと。

二九 石 盆石。盆山と同じく、盆にのせ広間の床に飾る名石。

三〇 高所と卑いところ 石の各部分の品格を評したものか。

三一 歌 「契りきな かたみに袖をしぼりつつ 末の松山なみこさじとは」清原元輔『後拾遺集』恋四。